

## 鶴亭の画業における時代区分 —その作風展開の特質について—

平井 啓修（関西大学大学院）

鶴亭は享保七年（1722）長崎で生まれ、聖福寺の住持であった岳宗元璋の弟子となり、黄檗僧となった人物である。しかし、岳宗元璋が示寂した後、理由は不明であるが還俗して上方に移住する。画を熊斐に学び、上方を中心に活動した。その足跡が明らかでない部分も多く、いまだ詳細な研究がなされていない。落款の研究については一部の論考に見られるものの、画業全体については明確化されていない。そこで本発表では、落款による時代区分と作風による時代区分を併用して用い、それら二つの時代区分から明らかになる作風の展開とその特質について述べてみたい。

作品を落款に基づいて分類すると、号の違いから三つの時期に分かれる。すなわち、延享四年（1747）～宝暦十一年（1761）の浄博期、明和元年（1764）～明和二年（1765）の善農期、明和五年以降の浄光期である。次に、年紀作品の作風を手がかりに分類すると、大きく四つの時期に分けることができる。初期は延享四年～宝暦五年（1755）、中期は宝暦八年（1758）～宝暦十一年、後期は明和元年～明和七年（1770）、晩期は明和九年（1772）以降の四期である。

署名や印章から浄博期に分類されている作品群は、長期間にわたっているため、署名の書体や使用されている号、印章にかなりのばらつきがある。そこで作風による分類を試みると、宝暦五年頃までを初期として、宝暦八年の年紀を持つ《牡丹小禽図》以降は、初期に見られる硬さがとれ、繊細な筆づかいで描かれていることが確認できる。中期に関しては、ぼかし画法の上達とともにモチーフを画面の端に配し、縦長の構図で描くという特徴が表れる時期である。善農期に入ると水墨の作品が多くなる。生涯を通してそのほとんどが花鳥図である鶴亭が、善農期以後、山水図や富嶽図を数多く描くようになった。こうした変化は交友関係から類推すると、池大雅などの文人画家からの影響ではなかろうか。そこでは墨の滲みやかすれを活かした水墨画を積極的に制作し、自身の画風としているのである。続く浄光期に描かれた《牡丹綬帯鳥図》を見ると、そうした水墨画の学習をふまえながら、それまでの南蘋風花鳥画の特徴を活かして独自の著色花鳥画を仕上げていることが判明する。作風の違いから、落款の分類による浄光期の途中からは作風上の晩期とする。著色画において、南蘋風の影響を脱し、同時代の写生派風の作品を描いていることがその理由である。また制作のほとんどが水墨画となり、南蘋画のモチーフを保持しつつ、黄檗の影響を加味した作品となっている。

こうした考察によって、晩年には黄檗風的水墨画へと向かう鶴亭の作風展開の特質が明らかになる。同時に、鶴亭が到達した画風も把握することができるのである。つまり、江戸時代後期において、南蘋風絵画、黄檗絵画、文人画、写生派の各派を融合することで、鶴亭の作風が成立したことが明らかになるであろう。